

第1章

「目船上人」

針が0の次に進もうとしなかったのは覚えている。突然、侵入してきた青色ダイオード数千個分の洪水に僕らの体は宙に舞った。

「はて、何ごとだろう、今の音は。それに大川に向かった奇妙なひかりは・・・やや、だれか岸で横たわっておる。おくい、すぐに助けてやるから待っておれ」

「ううう、お兄ちゃん」

「さ・く・ら、温人！」

「ああ、あ、ゆ、太・・・」

「おい、しっかりしろ、だめだ、すっかり気をうしなっている。困った。おうそうじや、前にここを通ったとき、たしか傷ついた白鷺が一羽、水浴びをしておった。もしや、あれは、効能あらたかな薬湯かも知れん。汲んで、飲ませてみよう」

頭の中がぐるぐる光を追って駆けまわり、身体は地底に吸いついたまま動こうとしない。
何があつたんだろう、何が・・・。

「ヒエー、なんだ今の音は。びっくりして大八車がひっくり返ったじゃねえか。あつ、仏さんがおっこっちゃった。

ありやりや、膝の下から割れちゃってるでえ。やっとこさ重いのをここまで運んだのに、ついてねえ。今からもとの所へ返すのも面倒だし、盗んできたものを届けに行きやあ、待つてましたと捕まっちゃあ。

えーと、この辺はたしか富沢村だよなあ、しかたがねえ、ここへ置いていくか。

よっこらしよと。地藏さま、わしは富蔵という百姓です。どうも申しわけねえことをしました、恨まないでおくんなせえ、わしも背に腹は代えられんのでう、百姓やってたけど、年貢も納められん年が続いて、いよいよ夜逃げするしかねかった。村を抜けりやあ、お咎めがあるのは分つとつても、女房、子ども売りに出す始末でどうしようもねえ。

これからの身の起き所は、まだきまつりませんが、人づてによると、この備前の久具村から建部上一帯に大川の水を引き込む大普請がされてるとか。石割りは得意なもんでそんな手間仕事

にありつけねえかと。まあ、それがなくても、川原のすすきをねぐらの船ひきぐらいやれねえかと考えまして。で、その前に少しでも金子を手に入れてえと。

そこへ、ほれ、地藏さまがいらつしゃった。徳の高い彫りをなさつて立っておられた。こりゃあ、ただの石仏じゃあねえとすぐに思ったらしいですわ。庄屋の家からこつそり、大八車を借りてきて、やつとこさ、横にして、縄で何重にもぐるぐるにして、ここまで来たら、さっきのいきなりピカッでゴーン。腰を抜かしてしもうたんですわ。

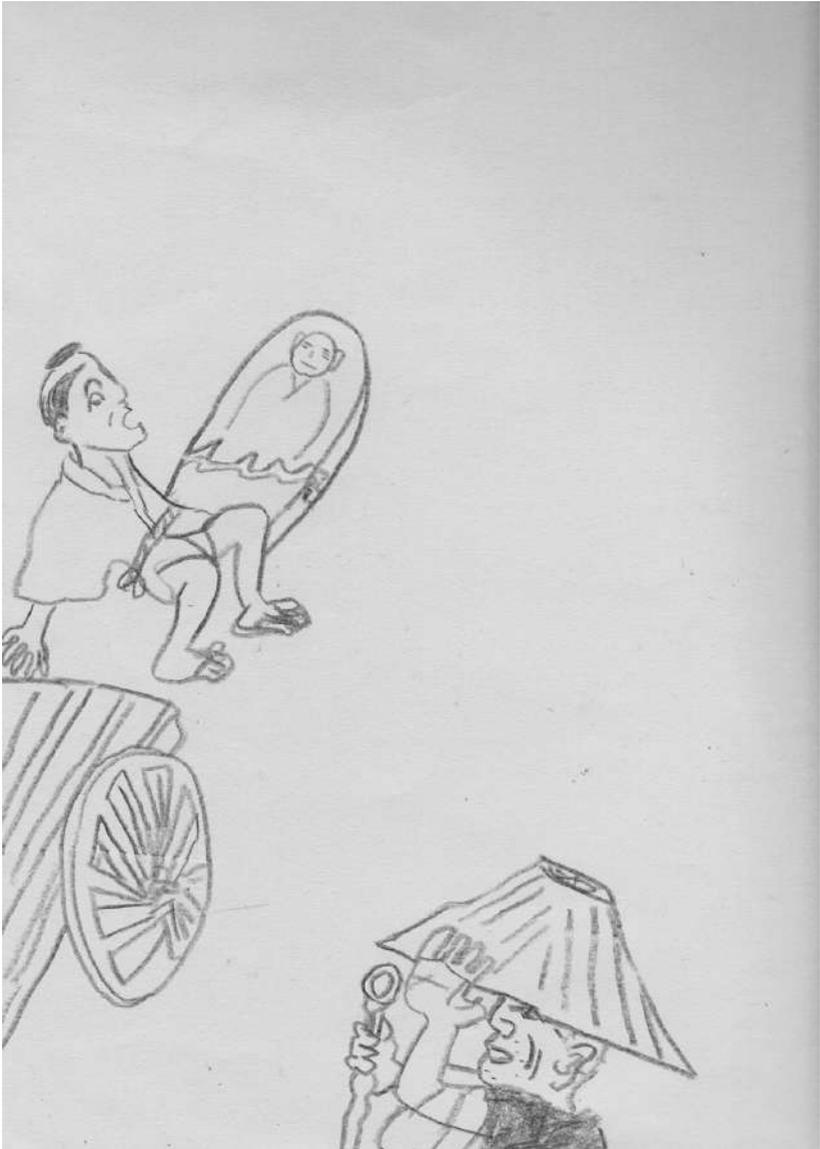
地藏さま、ついでだから、いや、地藏さまのお顔を前にしてますと、何というか、お許しを得られて、ぺらぺらと、とめどもなく愚痴が出てしまいます。

わしの郷は、ここよりずっと北の北でございます。それが何故この地まで？

えそ、そう、そうでございます。生まれた頃は今と違つてのんびりと、雨の日、風の日、雪の降る折りでも、田畑さえ怠りなく手を掛け大事に過ごしておれば、どうにか家族一同、やつてこれたもんです。それが、侍がいくさを始め、ここはわしのもんだ、いや、わしのだと、もう何十年も争つて、殿様が変わるたび、検知もしねえで、知らぬ存ぜぬで一粒の米も残らず持つて行かれました。勝も負けるもやつてる方は好き勝手、気分がいいんでしようなあ、下の者がどうなるうと、おかまいなし。こんなもんなんでしようかねえ、この世の中ちゅうもんは。

なんでも、この国はそもそもは、京の御所さまのずっと先代のヤマトタケルのみことという方がこの地を平定され、おだやかで、みな皆に分けへだてなく実りがほどこされるようにとつくられたとか。つくり話でしょうが、こんな話、それでも、少しはどこかに本当があるはずですよ。あああ、地藏さまをこんな痛々しいお姿にして、まだ泣きごとを言っている。

「おほか、娘やー、許してくれー、必ずやむかえに行くけんー」



「さあ、持って来たぞ、これを飲み干してみろ」

・・・ムム、ゲホッゲホッ

「よし、それでいい、気がついたか。そっちの、鼻に輪っかを掛けた子にも飲ませてやろう」

・・・ゴッホ、ゴッホン

「よし、あとはこの娘ごじやのう、おう、かわいそうに、足がすりむけておる。さっ、もう大丈夫じゃ、これを飲みなされ」

・・・ムムツ、「にいちゃん！」

「さくら！」

「そうか、おまえらは兄弟か」

「あつ、あの、すみません、なにがあつたんでしよう？」

「それがじゃ、せつそうにもようわからん。ゴーツと鳴って川の方に光るものがあつたので来てみれば、そちらが倒れておつた」

「ここは、どこですか・・・旭川みただけど」

「おお、鼻輪の坊子、よくその名を知っておるのう。このへんの百姓は、ただ大きいので大川と

呼んでおるが、せつそうは、大切な見ほとけの教えて、朝の陽のようにこの地を照らしめようとこの川を旭川と呼んでおる。なむみようほうれんげきよう・・・」

藁笠をかぶり、真つ黒に日焼した顔で何やらぶつぶつと、聞いたことのある言葉をつぶやく。岡山の駅前時々見たことのある白と黒の着物を着て、お椀を持って立っているお坊さん。それより、服はずっとボロボロだけど。

「ところで、せつそうの名は日船と申すが、おまえたちは見かけぬ顔で、身なりも変わつとるが、はて、どこから参つた」

それまで一心にお坊さんを見入っていた温人が「ヒエー」とすつとんきような声をあげた。

僕が「あつ、僕の家は、建部のあそこの」と指さそうとしたら・・・無い。

福渡病院やビジネスホテルの白い建物、桜並木、幸せ橋、送電線、山に見えていたゼンゼンの紅い建物さえ消え、岸辺に5、6軒の藁ぶき屋根の小屋が見えるだけ。

目の前に荷を積んだ川舟が下つてきて、舟乗りが一人、竹竿をあやつりながら何ごとがあつたのかと、こちらをうかがっている。その頭はチョンマゲに結つてある。

さくらが今にも泣きだしそうな顔でしがみつく。温人の震えながらうなずく眼に、僕は何が起きたのかを理解した・・・。

「おつ、気づいた、和尚さま、子が目を覚まされました」

「おにいちゃん！」 「鮎太！大丈夫か」

「そうか、それは一安心じゃ、なにせ三日三晩うわごとを言っておったから」

「・・・僕はどうしていたんでしよう、たしかあのとき急に目がくらんだようになって」

「鮎太、あんどき鮎太が倒れて、僕もさくらちゃんも怖くて動けなくて、和尚さんに助けてもらったんだ」

「困り果てていたところへ、ちょうど、この富蔵が通りかかっただけ。渡し場まで行き、ここ江田家まで運んだのじゃ」

「いやー、たまげた、わしもピカツときて、ひっくり返って・・・。そうして大川まで来たら、呼びとめられて、そりゃあ大変だと手助けしましたが、後々、聞いてみると、もう何が何だか、いまだに狐につままれたようで」

「話はその間にこの二人、といっても、ほとんど鼻輪のごじんからだ聞き及んだ。

なんとも、俄かには信じがたいことだが、荷袋の中の書物を拝見し、もはや疑うことなしとわかり申した」

「そうだ、僕は出かける時、温人と暇つぶしの質問ごっこをしようと「建部町史」通史編をリュックに入れて来たんだ。

「この書物、長崎に渡来しておるのは聞き及んでいたが、おそらくこれほどまでの、ものではないだろう。細かな字が寸法に違いもなく、一部のゆがみさえない。せつそうの解せない文字が多いので、書かれておることはよくはわからぬが、どうやら、この郷の成り立ちが細目に記されておるようじゃ。ハハハ、せつそうの墓までが記されておるようでは、まさしく、三百有余年も先から来たと言っても間違いなからう。絵がなんとも生き写したようだ」

「鮎太、僕たち、日船上人さまのいる一六〇〇年代に迷い込んだみたいだ」

「おにいちゃん、私たちどうしてこうなったの、もう帰れないの？」

僕にも、わからない。これは現実なんだとしか今は言えない……。

「おお、江田殿、お世話になります、子どもらは寝ましたか」

「はい、この数日、ほとんど眠れなかったようですが、鮎太さんが回復されて、皆、落ちついたようです。夕餉もすべて召し上がりました」

「それはよかった。いやはやなんとも、摩訶不思議なことが起きるものでござる。されど、あの鎌倉の国難において、日蓮さまの唱えられたお教で元寇をもの見事に退かせた、そのことを考えても、およそ、この世には人知を超える力があると信ぜざるをえません」

「そうでございますな、それならば私ども法華宗不受不施を信仰する者にも、必ずやその力の示される時が来るに違いありません」

「よくぞ言われた。今は不受不施を唱える者は寺を追われ、キリシタン同様、改宗を迫られておる。されど、いつの日か再興が訪れる。あの数百年先の書物に不受不施の四文字が書かれておるのは。それはのちのちまでこの教えが続いたということじゃ。これぞ屈せず励めという天からの声。それまで誓文を立て正法を守り抜くのじゃ。明日からはこのことをもたらしてくれた、あの子らのためにも、お唱えをすることにしよう」

「おにいちちゃん、眠った？」

「いや」

「お母さんたちどうしてるかなあ、おばあちゃんも、心配してるだろうね」

「ああ、そうだな……。ごめんな、こんなことになって、温人まで」

「大丈夫だよ、鮎太ならすぐにひらめいて、気がつくとまた家の中ってことになってるさ。それに、たけべの昔に行つて、本を書こうと言いだしたのは俺なんだし」

「こんななんだつたら、私、おばあちゃんをもっと大事にしてあげればよかった。あの朝、おばあちゃんから勉強のこと言われて、プイって怒ったから、それで、私がいなくなったと思つてるかもしれない」

「鮎太、じつは俺……」

真つ暗だった部屋にポツンと白い明りが浮かんだ。温人の手にケイタイがあった。

「ほんとうは使っちゃいけないんだけど、俺、持って来たんだ。さくらちゃん、これ」

待ち受け画面に先月の夏祭りで浴衣を着てピースする、さくらとおばあちゃんが写っている。

「アンテナは圏外だから通じないけど写真は見えるよ。電池がなくなれば終わりだけど」

「ウウ、おばあちゃん、会いたいよー」

「さくら！」 「さくらちゃん！」

「はあー、何てかわいそうなんだ、となりで聞いてても涙が出らあ。わしも、かかあと娘におまんまを頂けると聞いて手離したが、それでも悲しゅうてならん。なんとかしてやりてえが、この身さえまならんとあつては情けねえのう」

朝、目が覚めると今まで通りの2015年9月28日が来ていないかと期待したけど、お教の声が届いて、昨日の続きだとわかった。腕時計の針も12のまま動いていない。

ふすまが開いてチョンマゲの人、たしか富蔵さんって言った、が恐る恐る中をのぞいて、「あのー、目がさめましたか、もし、お身体がよろしければ、お上りさまがお呼びです」と教えてくれた。

座敷では、ちようどお唱えが終わったのだろうか、頭を青々と剃ったお坊さん、大きく髪を結った若い女の四人で日船上人さまを囲んでなごやかに話をしていた。

「あ、あの、おはようございます」

「おお、よく眠れたか、こちらへ来なさい。さきほど話しをした子たちじゃ。鮎太に温人に、さくらじゃ」

「僕らはお上人様の横に座り、その輪に加わった。」

「さて紹介しておこう、この僧侶は日勢と言う、それと僧侶を信頼しておる、大田村の娘ごたちじゃ。今しがた、おまえたちが無事に生まれたところへ帰れるように、お唱えをしたところじゃ」

「お上人さまからお聞きしましたが、何でも数百年先のたけべから来られたとか。私もここ建部で生まれ育ちました。遠い先にもこの郷が栄えていることを知り、うれしく思います」

「三百数十年のちの大田村はどうなっているのでしょうか、ぜひ、伺いたいわ、ねえ妙意さま」

「そうですね、もし妙現さんが生きていたら三百数十二歳ですわね」

「じゃあ妙定さまは三百数十一歳で妙意さまは三百数十四歳、妙勢さまなんか三百八十歳！」

「あ、ははは、まあ、はしたない、お上人さまの前で。でも、ほんとにどのようですか？」

「えっ、大田村と渡し場のある福渡村がお山に穴が開いて通れますの？」「大川に備前の国と行き来する大橋が架けられてるですって」「大田の盆踊りで異国のフラダンスとか言う踊りが披露されるのですか」「まあ、お上人さまが見つつけられた大川の葉湯に、備前や美作からも大勢の人が来られて、八幡の湯と言ってにぎわっているんですか。お上人さま、よろしかったですね」

「ははは、のちの世にまで民に喜ばれるとは仏につかえる身として冥利につきる。まして国の定めで、何の信仰をしようとも許されると聞いて安心した」

「私たちはきっとそのための石づえになるのですね、日勢さま」

「そのとおりじゃな、妙勢どの」・・・。

この日、集まった人は聞くと僕らと歳があまり変わらない。なのにずっと大人に見えた。

「あなたたちが早くご家族の待つ世に戻れますように、これからもお唱えしますからね」

自分のことよりこの先の世の人のしあわせを気にかけていた。

何だか、昨日まで悲しがつてばかりいたのが恥ずかしい。

それは、その夜、温人から、これからこの人たちに降りかかるつらい試練を聞かされ、尚のこ
と強まった。

「大田に比丘尼塚びくにづかと呼ばれる石塔があるんだ。江戸幕府から日蓮宗不受不施派の信者は改宗
しろと命令されて、死をもつて抗議した人をまつてあるんだ。その人たちは津山の福田村の洞
窟に入って、断食しながら悪い政治が終わり、早くひらかれた世が来ますようにって誂教を続け

たんだ。それで、最後まで信念を曲げずに亡くなったんだ。福田五人衆と言って、日勢僧侶と女の人たちがそうなんだ」

今朝ほど笑っていた五人の顔が浮かんた。僕たちの時代を遠く輝く星のように見つめ、いつし
ようけんめい心に描いていた。

僕の中に何か大きな勇気のようなものがフツフツと湧きおこるのを感じた。

三八

南無妙法蓮華經



この物語に登場する人物やその出来事は、あくまで想像上のもので実際の人物、史実とは異なります。